

ひまわりからの メッセージ

53号

2015. 9. 14.

西濃園域
発達障がい支援センター
ひまわり

発行人：中野たみ子



移りゆく

季節の中で



蟬の音がいつのまにか消えて、庭先で虫の音が大きくなりました。落葉樹の葉は、少し緑が薄くなってきましたし、すすきの穂が風に揺れています。

この夏、皆さんはどの様に過ごされたのでしょうか。

私は、東京、長野、広島など忙しく日を送りました。多くは自己研鑽のためでしたが、一日だけ松本でオーケストラを聴きました。昔は齋藤秀雄を師とする音楽家が松本に集い、「サイトウキネンズステイバル」と呼んでいたのですが、今年から「セイジオザワ松本ズステイバル」

と名を替えて開催されたのです。小澤征爾は体調を崩していて、私はフビオ・ルイーシの指揮でマーラーの交響曲第五番の葬送行進曲を聴きました。十年前までは、ほとんど毎年出かけていましたが、本当に久しぶりに生の演奏にひたりました。あわただしく余裕のない生活の中でほんのひととき、こういう時が持てたということ、次の活力につながると思つて、感謝しました。

しかし、次の週には、東日本大震災のあとの子どもたちの報告を聞くことになりました。宮城からの報告でしたが、四年経つてもずつと心に傷を負つたまま生きておられる人々のこと。そして、そんな大人の中にあつて、子ども達の中に衝動性のある子が増えているとのこと。あるいは故郷を遠くはなれた地にあつて、何もできなかった自分への罪悪感に苦しむ人々など、災害がもたらすものの悲惨さに胸がふさがれる思いでした。

その震災の地に、また大雨、浸水の報が入ってきました。結局は傍観者にしかなれないのか、自分に何ができるのか、ただただ自分自身と与えられた職務を全うするしかないのだと思つて、無力感も否のませんでした。

「寄り添う」「受容」という



ことばの生む誤解について

先日のこと。学校では大人しく何の問題のない生徒だと言われているのに、家では気に入らないとお母さんに暴言・暴力というお子さんに出会いました。

高学年になって、ゲームの時間を決めても守れなくていつまでもやってるので困っているという。でもよく聞いてみると、お母さんは小さい時から「子どもさんに寄り添ってあげて下さい。受容してあげることが大事です」と、むっと言われてきたので、子どもがお母さんに「くして欲しい」と言ったら何でもきいてあげなければと思っってきたというのです。その結果、抱いて起こしてほしいと言われれば抱っこをし、食べさせてほしいと言われれば食べさせてやり、お風呂に一緒に入り……という生活をしてきたとのことです。

それが寄り添ってやることであり、受容することであり、親の愛情であると信じてきたのださうです。

私は以前から「寄り添う」「受容する」ということには、誤解されかねない危なさを感じてはいたのですが、いざ、そういう現状に出会った時、これは一体、誰のせいなのか……と思いました。

名のある大学の先生や、有名な子育ての専門家に言われれば、育児に迷うお母さんたちは、信じてしまわれるでしょう。では、その先生方には、責任はないのでしょうか……？ 私は、大いにあると思えます。

子どもを育てるということ

く育てる。育てられる。関係性の中で

先週、私は広島にいました。臨床発達心理士の全国大会に出席するためです。そこで中京大学の鯨岡峻先生のお話を聞き、人を育てるということについて、とても大切なことと思えましたので、お伝えしておこうと思えます。

まず、私たちのように、子育てにかかわっている保育者や、教育者、臨床家の営みは、当然、人を育てるということです。それは、単に人を理解するということではあ

りません。子どもは、「育てられて育つ」という存在です。から、大人の方は、子どもを育てることを通して自らも成長していくわけです。私の人生を思い返してみても、大半は子どもたちによって育ってもらったのだと思います。

この「育てる」育てられる」という関係の中で、私たちは何を育てるのか、いかに育てるのかということが当然問われることになるでしょう。

鯨岡先生は、子どもを育てるといふことは、一人前の大人に育てることであり、それは「主体としての二面の心である」と言われます。つまり、「私は私」と自分を前面に出す面と、「私はみんなの中の私、私たちの中の一人」と周囲と共に生きる面の二つであるといふことです。この二つの面の心をもつことが、「一人前」の意味であり、それが育てるといふことの目標であると述べておられます。

では、育てる目標に対して、私たち大人は何をすべきなのかといふことになります。鯨岡先生は、「養護の働き」と「教育の働き」といふ二つの面が必要であると説かれています。

養護とは、子どもの思いを受け止め、その存在を認め喜びといふことで、大人が子どもを温く包みこむ心の働きで、それを総称して「養護」といふことは使っておられます。

一方、未来の大人である子どもに対して、子どもが大人に近づくように、大人の願う活動に誘い、その活動を促し、時には手ほどきして教え、時には禁止や制止を示し、場合によっては叱るといふことが必要です。これを「教育」と呼んでおられ、この二つの面が子どもを育てる上で大切だと言われるのです。

鯨岡先生のことばをお借りすれば、前述のお母さんは、「養護」といふ面ばかりを大切にしてこられたといふことでしょうか。

私も福祉という分野に生きてるので、この「寄り添いや「受容」といふことは大切なことであると思っておりますが、そのことばかりを強調しすぎると、保護者の方に対して、まちがった認識を植えつけることになりかねません。必ずべきだと思えます。

「躰」と称しての虐待もあとをたたく、ネグレクトも
多いと聞きます。子どもたちが命を軽視するよう
なことは簡単に言うことも増えたように思いま
す。死に対する願望を口にする子にも出会います。
そして、障がいもフ人やお年を召した人々などの
弱者に対する差別、暴言など、世の中は一体どう
なっていくのでしょうか。いくら法律で差別を禁じても
一人一人の人の心の中に、まずは誰の命も大切に思う
ということがなければ、差別が無くなることはないので
う。

とにかく私たち大人がしっかりしないとイケませんね。

子どもたちは、大人の姿から学んでいくのですから、今
の子どもたちは……と言う前に、自分が本当に子ども
たちのモデルになれるのかどうか……。子ども一人ひと
りの命を大切に思い、包み込むあたにかやをもってい
いるのかどうか、そして、それをベースにして、子ども
の気持ちを受け止めた上で子どもたちを育てていけ
るのかどうか……。私も反省しきりです。

ところで、前述の鯨岡先生は、子どもたちとの関係

について、その関わりを「エピソード記述」するよう勧め
ています。子どもたちとの関わりの中でハッとしたことや
心を動かされたことなどを書きとめておいて、あとでま
とめてみる作業です。人と人との間でわき起った情
動を、書いてみることで自分自身へのふり返りにもな
り、その記述を同僚にも読んでもらうことで、相手に
理解してもらおうというものです。その場合、背景とな
ったこと、エピソード、考察という三点をセットにして、
その出来事を分かりやすく記述することで、その人独自
の子どもと生きる姿勢が浮きぼりにされることになり
ます。実はそこに、子どもに育てられる大人が在ると
いうことでしょう。

私たちは、客観的に記述することに心がけるよう
にと言われてきました。なるほど人と人の間には
客観的記述だけでは記述することができないものがあ
ることを先生の講演の中で再認識したことでした。
目に見えないけれども、そこに在るも
の。心と心をつなぐもの。やはり大切に
したいものです。



福祉施策について

自分の子どもをどう育てる？

親として問われるもの



最近、放課後等デイサービスが増えつづけています。事業所が増えつづけている背景には、それが事業として営利の対象として価値があると考えられているからです。

学校まで子どもを迎えに行き、一定時間を事業所で過ごす後、自宅まで送り届けてくれるということは、保護者の側からしても、とてもありがたい制度であると思います。

しかし……

お母さんたちは、放課後等デイサービスに何を望まれているのでしょうか？、まず、そこをもう一度考えてみましょう。子どもの発達を促してもらうため？、少しでも子育てに力を貸してほしい？、少し親としてホッとできる時間がある？、預かってもらえればいい？、

理由は色々あると思いますが、大事なことは、子どもを托す事業所が、本当に信頼に足る事業所であるかどうか、見極める目をもつことだと思います。

福祉サービスは色々ありますが、児童を対象にした事業所には、子どもを育てていく責任があるはずで、生活指導を通して、自分の子にどのような思いをもつて、どんなことをしてくれる所なのか、親として知っておかなくてはなりません。

乳幼児期から、お子さんたちは、将来の自立に向けて様々な療育、保育、教育を受けてきて、「今」があります。児童発達支援事業所（ひまわり学園、たんぽぽ学園等々各市町の幼児の教室など）では、きちんと「個別支援計画」が示されてきたはずで、園との連携もとられてきたはずで、そして、就学時には、園と学校との間で、支援の引き継ぎが行われてきたと思います。

そういったことを知った上で、一人ひとりの子どもに合わせた個別支援計画がきちんと作られているのか、心配です。

先日、放課後等デイサービスの方々を集めた県の
研修会で話をする機会をいただきました。そこで
ママズママ子どもたちのことについて触れた中で、ある
自閉症のお子さんの行動についてたずねてみました。
あるお母さんがうかがった話ですが、携帯電話を
かける練習をしようと思って、ショッピングセンターに
行った時のこと。いよいよ、お母さんとお子さんが離れ
て電話をするという場面設定をしてお母さんが
「じゃあね、電話ちょうだい」と言いました。「その
時、お子さんはどうしたと思いますか」と、たずねて
みました。お子さんの特性を知っている方々は、容易
にイメージできて笑顔が見られました。そうです。
お母さんのことには、「かけて」ということが省略
されていたので、お子さんは当然「ちょうだい」とい
うことは通りに、お母さんに電話を手渡したので
した。

その会場では、私が言ったことが分かった人は、十分
の一人くらいだったでしょうか。多くの方は「何のこと？」
と言うようにきょとんとおられたのです。

当然私は心配になりました。

子どもたちのことを分かっている人達が、子ども
たちを預かるの？、その人たちは、子どもたちをどの
ように育てようとしているの？、

自分の気持ちに折り合いをつけることが苦手な子に
は、ずっと好きなことをさせておくの？、そのことは、誤
学習につながったり、今までその見も自立に向け
育ててきた多くの人の努力を無駄にすることには
ならないの？、

多動な子は叱られてばかりいるのじゃないの？、そ
れは二次障がいも招くことにはならないの？、

「どんなお子さんでも受け入れます」と言えば聞
こえはいいけど、安全面は大丈夫なの？、

現に、他の地域では、多くのトラブルが発生していま
す。お母さんたちの思いや願いとは余りにもかかけ離れ
た事業所が存在しているという事です。

まず、お母さん達が賢くなりましょう。

「見学は認めません」という所は、本当に信頼して

いいでしょうか？

個別の支援計画の作られないような所は、最初から話になりません。お母さんが支払う利用料は、十分の一ですが、十分の九は税金が使われているのです。税金もどんなに使っても、しっかりと子どもを育ててくれるなら惜しくはありませんが、利用することで逆にマイナスの子育てになるような所は、避けるべきです。

保護者がしっかりと目をもつことが、今の時代ほど要求されている時は今までなかったのではなんでしょうか。

就学先にしても、福祉サービスの利用にしても、目先だけのことを考えず、遠い将来（と言えども子どもはすぐに大きくなります。）のお子さんの自立に役立つのかどうか是非考えて下さい。

そして、学校との連携も考えていきましょう。



お知らせ

・社会福祉課の依頼で、今度思春期についての話をすることになりました。

時間がおありの方は、いらして下さい。(9/30)

・心理士と呼ばれる人たちは大勢いますが、法案が国会を通過したので、公認心理師としてこれから国家資格となります。詳細はまだわかりませんが、色々な制約がかかってくるかと考えています。

・十月の親の会は十九日(月)になります。

・高等教育の支援の現状について、富山大学や京都大学などの取りくみについてもお話したいと思っています。

※運動会練習に参加できない子、運動会後にもえつきまじょう子

相談して下さいね!!

